

学校教育の場におけるビブリオバトルの教育的利用についての研究

ー主体的な学習への仕掛けとしてー

高校教育研修課 主任指導主事 泉村 靖治

主任指導主事 青山 禎尚

はじめに

ビブリオバトルは、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくり手法」であり、「本を通して人を知る」ことからコミュニケーションの場づくりに、「人を通して本を知る」ことから読書推進に役立つ手法である。課題を発見し解決するためには情報を収集し整理分析する力が必要であるが、高校生にはその基盤となる読書経験や読書習慣が不足している現状がある。ビブリオバトルの手法が読書への導きとなり、情報活用能力育成への橋渡しとなりうるかということについて検証するとともに、学校での効果的な活用方法を探る。

1 ビブリオバトルについて

ビブリオバトルは、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくり手法」として設計されているが、誰でも開催できる「本の紹介ゲーム」でもある。数名のプレゼンターがそれぞれ5分以内で本を紹介し、聴衆がその中で最も読みたくなった本に投票するというシンプルなルールに基づいている（図1）。

2010年からは東京で首都決戦が行われ、メディアへの登場も増えてきた。現在、書店、学校、公共図書館ばかりでなく、大学での授業、企業の研修やワークショップなどにおいても取り入れられている。

(1) ビブリオバトルの成り立ち

ビブリオバトルは、谷口忠大（現立命館大学准教授 ビブリオバトル普及委員会代表）が2007年に京都大学の研究室で勉強会を始める際に、輪読会よりも良い方法として発案したものである。「参加者で本の内容を共有できる」（書籍情報共有機能）、「スピーチの訓練になる」（スピーチ能力向上機能）、「いい本が見つかる」（良書探索機能）、「お互いの理解が深まる」（コミュニティ開発機能）といった効果がもたらされるように設計されている。

(2) ビブリオバトル実施の状況

日本国内におけるビブリオバトルは、平成27年2月までに全国215大学、169の公立図書館で開催されたことが分かっている（ビブリオバトル普及委員会事務局調べ¹⁾）。兵庫県では、学校や図書館等での実施のほか、平成25年度より兵庫県教育委員会主催の「ひょうご子ども読書活動推進フォーラム」において中学生、高校生と社会人を対象にした「ビブリオバトル甲子園」や、教員を対象にした当所の高等学校初任者研修選択研修での実施がある。

ア ひょうご子ども読書活動推進フォーラム

「ひょうご子ども読書活動推進フォーラム」では、県内における読書環境のより一層の充実を目指し、多くの本に接する機会を提供する目的で「ビブリオバトル甲子園」を実施している。県内五地区での予選から決勝戦へとおよそ2ヶ月かけて行う、平成25年度の総参加者数は702名を数えるイベントである（図2）。

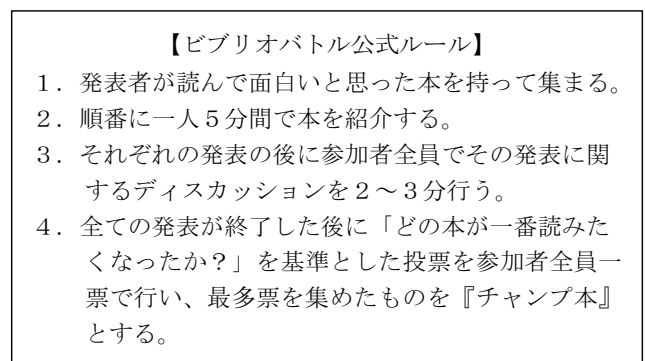


図1 ビブリオバトル公式ルール

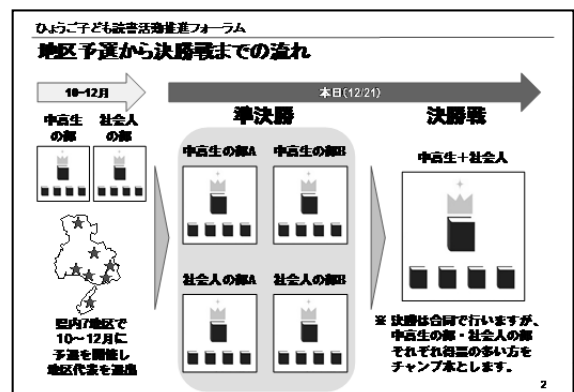


図2 ひょうご子ども読書活動推進フォーラムの流れ

「ビブリオバトル甲子園」の参加者による事後のアンケートでは、「参加することの楽しさ」や「読書意欲の昂進」、「未知の本の紹介」、「人と本への興味」に関する感想が多かった。地区フォーラムではアンケート回答者の 60.9%が「おもしろかった」、27.6%が「また観戦したい」、全県フォーラムではアンケート回答者全員が「おもしろかった」と答えており、参加者の満足度は高かった。

イ 高等学校初任者研修

当所の高等学校初任者研修では、平成 25 年度より兵庫県立図書館での選択研修において、県立図書館の本を利用したビブリオバトルを実施している（図 3）。本年度は 40 名が参加し、本の検索方法の研修の後で、グループワークの形式でのスピーチの練習と読書指導の研修を兼ねてビブリオバトルを体験した。参加後の感想はほとんどが「面白い」または「楽しい」と書いており、他には「時間が経つのを忘れるほど熱中した」「本と人への興味がわいた」「いろいろな本を知ることができた」「競わせることで刺激があって良い」などのほか、発表者は「難しかった」が「楽しかった」、聴衆は「熱意をもって紹介されて読みたくなった」という感想が見られた。



図 3 高等学校初任者研修

(3) ビブリオバトルの教育場面での効果

ビブリオバトルの教育場面での効果について、ビブリオバトル普及委員会副代表の吉野英知は、「本を読む行為を間接的に促進させる効果がある」と述べ、その理由として次の 2 点を挙げている²⁾。「一般的に本を読む行為は知識や情報のインプットであるが、発表した後に相手の反応がリアルタイムで返ってくるビブリオバトルでは、アウトプット発表によって自身の知識や理解の再構築が行われることで、インプットである本を読むとしようとする行為が促進される」「関心の広がりや全く異なる他人から本を紹介してもらうことで、自身が今まで縁遠かった世界への足掛かりができる」。

文化庁の「平成 25 年度国語に関する世論調査」³⁾によると、1 ヶ月に 1 冊も本を読まないと答えた人は 47.5%で、10 年前より 10 ポイント増加している。また、国立青少年教育振興機構による「子どもの読書活動と人材育成に関する調査〈高校生用〉」（平成 24 年 3 月実施）⁴⁾の結果では、本を読まない理由として「普段から本を読まないから」（42.0%）、「読みたい本がなかったから」（41.0%）が最も高い。このような「読書離れ」の状況への対策として、ビブリオバトルの「本を読む行為を間接的に促進させる効果」が利用できると思われる。

2 太子高校によるビブリオバトルのアンケート調査の結果

(1) 調査の概要

ア 兵庫県立太子高等学校でのビブリオバトル

兵庫県揖保郡にある県立太子高等学校（以下、「太子高校」という）は、平成 19 年より総合学科に改編し、現在 8 年目の学校である。太子高校では、5 単位の総合的な学習の時間において、職業・学問分野を主体的に探究する「基本総学」（2 年次 2 単位）と自ら選択した課題を研究する「研究総学」（2 年次 1 単位、3 年次 2 単位）を実施している。このうちの「研究総学」において、一人一人が 2 年間探究した成果を 8000 字の論文にまとめるプロジェクト学習を行っている。その際、生徒がインターネットから情報を切り貼りして論文を作成することがないようにするためにも、研究の際の基礎となる文献を読み解く力を身につけさせることが重要になっている。読解の力は一朝一夕に身につくものではないため、平成 26 年度は 5 月と 10 月に「①『研究総学』を進めるにあたっての基盤となる、『本を読み解く』力を養わせる。②読書の楽しさや奥深さを実感し読書への興味関心を深めるとともに、旺盛な知的好奇心を持たせる。③本の紹介

をすることを通して、物事を適切に伝える楽しさや難しさを実感させる。④発表したり人の話を聴いたりすることで、コミュニケーション能力を養わせる。⑤評価用紙に記入させることにより、適切な判断力を身につけさせる。」の5つの目的を設定してビブリオバトルを実施した。太子高校の取組がビブリオバトルの教育的利用に適した事例であることから、太子高校で実施されたアンケート調査の結果を分析した。

イ 太子高校でのアンケート調査

太子高校では、ビブリオバトルに参加した2年次生220名を対象とし、2回目のビブリオバトル実施後の平成26年10月末に、①読書習慣、②読書意識、③ビブリオバトル実施後の変化を調べることを目的として以下の調査を行った（図4）。この調査によって、ビブリオバトルが生徒にどのような変化を与えるかを知ることができる。

「ビブリオバトル」についてのアンケート

1. あなたは学校の課題以外で、どのくらい本を読みますか。適当なものを1つ選び、記号に○をつけてください。
(a 毎週1冊以上 b 毎月2冊程度 c 毎月1冊程度 d ほとんど読まない)

2. あなたの読書に対する感じ方として適当なものを1つ選び、記号に○をつけてください。
(a とてもあてはまる b まあまああてはまる c あまりあてはまらない d 全くあてはまらない)

1. ベストセラーの本は、読んでおきたい。
2. 友だちと本の内容を話題にして話すことがある。
3. 映画になった本は読みたくなる。
4. 本の続きが知りたくて、読むのをやめられなくなったことがある。
5. まだ友だちが知らない、おもしろい本を見つけるとうれしくなる。
6. 本を読んで泣いたことがある。
7. 本を読み終わったときに世界がひろがった気がした。
8. おもしろい本を紹介してほしい。

3. ビブリオバトルの実施により変わったことについて該当するものを選び、記号に○をつけてください。
(a とてもあてはまる b まあまああてはまる c あまりあてはまらない d 全くあてはまらない)

1. 本を読む冊数が増えた。
2. 本の話題で友だちと話す機会が増えた。
3. またビブリオバトルを行いたいと思う。
4. 敬遠していた作家の本が面白いと思えるようになった。
5. TVよりも、本が面白くなった。
6. 図書室に行く回数が増えた。
7. 本を読む時間が増えた。
8. 話をするときの組み立て方が分かるようになった。
9. 伝えたいことをまとめる方法が分かった。
10. 人前で話すことに抵抗が少なくなった。

図4 太子高校による、ビブリオバトル実施後のアンケート

(2) アンケート調査の結果と分析

ア 読書習慣について

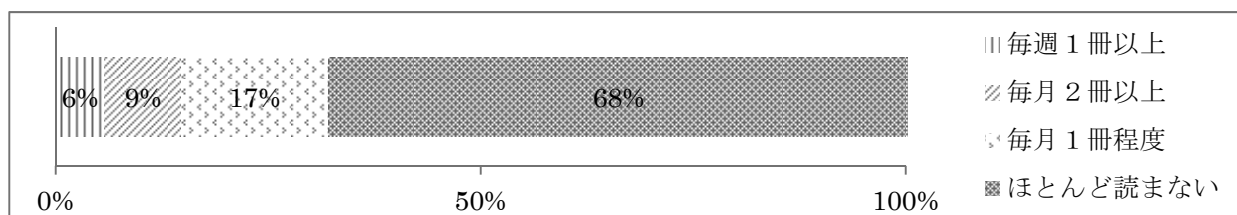


図5 読書習慣について

読書習慣についての調査では、学校の課題以外でほとんど本を読まない生徒は68%にのぼっている（図

5)。前掲の「平成 25 年度国語に関する世論調査」によると、1 ヶ月に 1 冊も本を読まない人の割合は 16 歳から 20 歳の間の年齢層で 42.7%となっており、この時期の太子高校の 2 年生はその数値を上回っている。高校 2 年生の 10 月は 2 学期の中間考査がある上に、部活動の大会も控えていて、読書のための時間を作りにくい時期であったことを考慮に入れる必要があるが、読書習慣が身につけていない者が多くいるという結果である。

イ 読書意識について

読書意識に関して注目すべきは、73%が「本の続きが知りたくて、読むのをやめられなくなったことがある」という経験を持っていることである。一度本の世界に入ると、7 割の者が続きを知りたくなるという経験をしている。さらに「おもしろい本を紹介してほしい」と読書への関心を持っている者が 58%いることがわかった。「映画になった本は読みたくなる」も 53%と、読書への興味づけ次第で、読書意欲が喚起される生徒が相当数いることが読み取れる（図 6）。

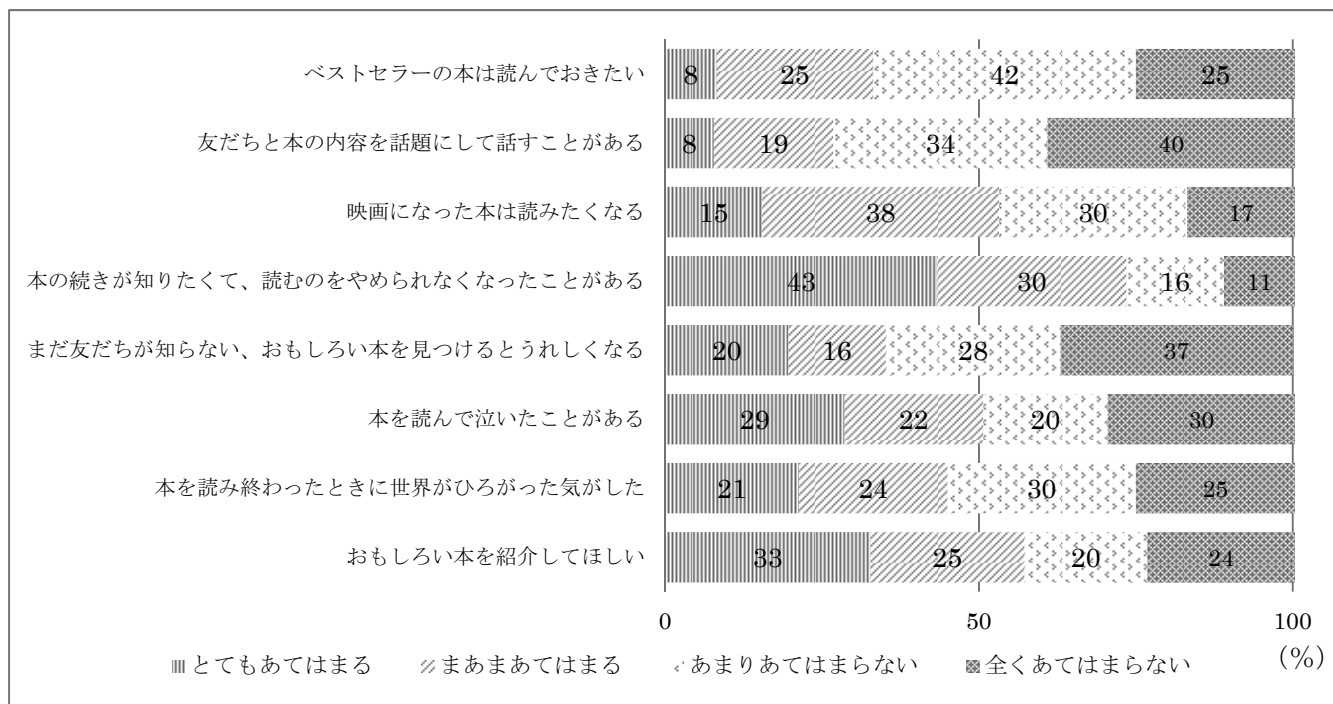


図 6 読書意識について

ウ ビブリオバトル実施後の変化について

(7) 「良書探索機能」における変化

ビブリオバトル実施後の変化（図 7）については、変化があったという回答が多く見られた。特に肯定的な回答が多かったのは、新たな本の情報を知り、読みたい本と出会うための「良書探索機能」に関する項目である。具体的には、「自分が何を読みたいのかわかったような気がする」と「TV よりもおもしろい本があることがわかった」の 2 つの質問に 30%以上の肯定的な回答があった。逆に言えば、自分の読みたい本がわかっていない生徒が 3 割いたということである。また、ビブリオバトルによって本の情報を得ることにより、TV よりも面白い本があることに 3 割の生徒が気づいたということである。前述の読書意識のアンケートにおいて「おもしろい本を紹介してほしい」という生徒が 58%いるという数値とあわせて考えると、生徒はビブリオバトルが担うような本の紹介を強く求めていることがわかる。さらに、「敬遠していた種類の本がおもしろいと思えるようになった」という項目も肯定的な回答が 24%あり、ビブリオバトルは 3 割近い生徒の読書意識に変化を与えている。

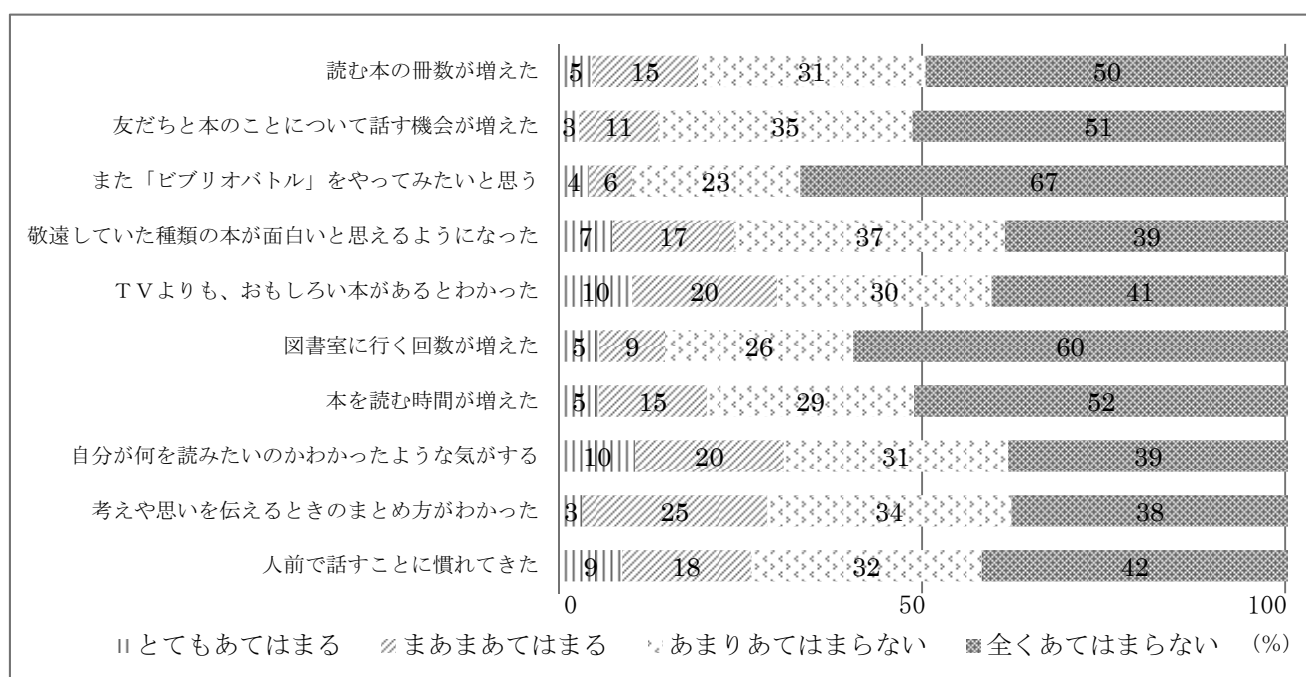


図7 ビブリオバトル実施後の変化について

この傾向は、ビブリオバトル実施後に読書意識や読書習慣に対して肯定的な変化が見られたと回答した生徒⁵⁾を抽出してみると、更に顕著である（図8）。これらの生徒に共通するのは、例外なく「敬遠していた種類の本が面白いと思えるようになった」、「おもしろい本を紹介してほしい」、「TVよりもおもしろい本があることがわかった」という良書探索機能について肯定的な回答をしていることである。「また『ビブリオバトル』をやりたい」と答えた回答者も同様の傾向を示している。ビブリオバトルが良書を紹介してくれるという期待感を抱かせることができおり、全員を対象とした図7の調査の結果と同じ傾向を表している。これらのことから、ビブリオバトルの実施により面白い本が紹介されるという期待が生まれて読書意欲が高まるところに、ビブリオバトルを教育の場で利用する意義があると考えられる。

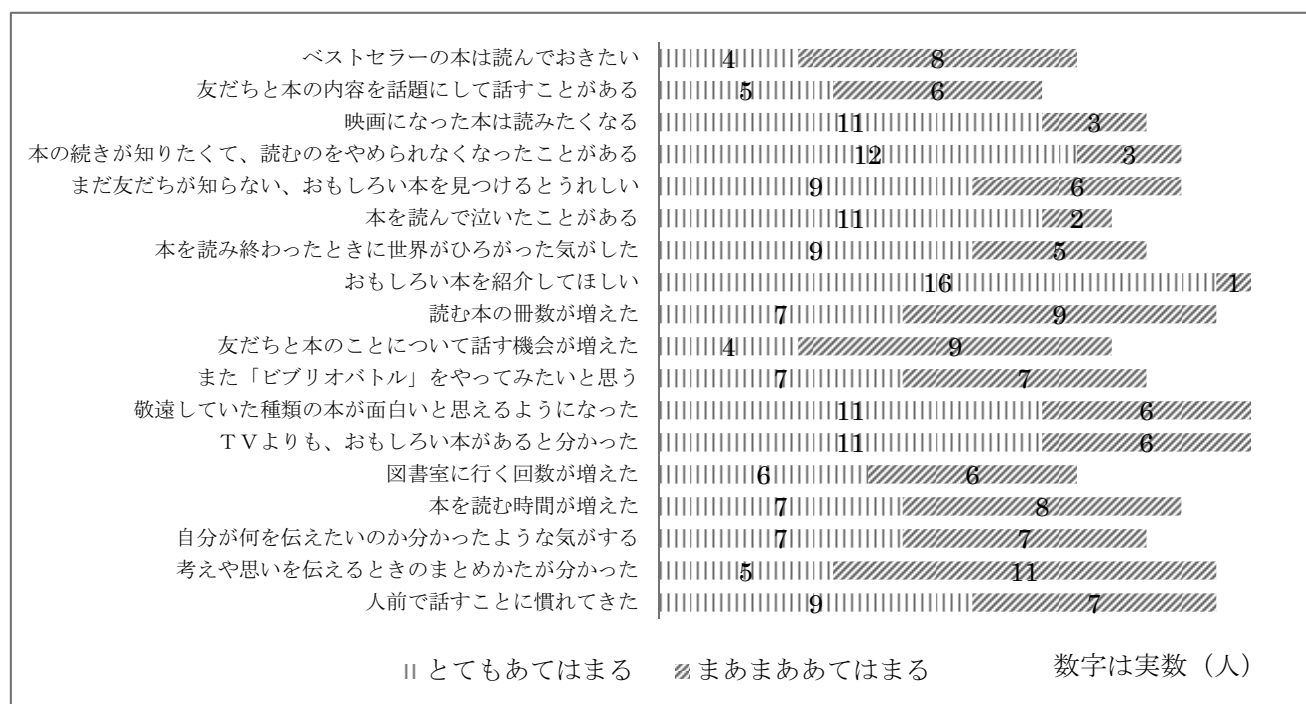


図8 ビブリオバトル実施後に肯定的な変化が見られたと回答した生徒（17名）の傾向

(イ) 「スピーチ能力向上機能」における変化

ビブリオバトルには聴衆として参加する際の「良書探索機能」への肯定的な反応ばかりではなく、発表者の「スピーチ能力向上機能」に関しても肯定的な意見が多い。「人前で話すことに慣れてきた」「考えや思いを伝えるときのまとめ方がわかった」という回答も、それぞれ27% (58人)、28% (63人) いた。ビブリオバトルを実施する際には、人前に出て話すことは苦手だという理由で発表者が集まらないことが多いが、実際にビブリオバトルを経験してみた後は自信が付き、人前で発表することへの抵抗が少なくなっている生徒が3割近くいることがわかる。

(3) 総合的な学習での教育的利用について

太子高校のアンケート調査では、7割近くの生徒が1ヶ月に1冊も本を読まないという回答する一方、おもしろい本を読みたいと思っている生徒は5割以上いる。ビブリオバトルを実施したことにより、3割近い生徒が本への関心を高め、また2割の生徒は読む本の冊数や読む時間が増えていた。また、3割近い生徒が発表に慣れたと回答していた。今回は、太子高校が「研究総学」において8000字の論文作成を行なう前段階としてビブリオバトルを実施した事例をもとに分析した。これまでの結果を踏まえると、ビブリオバトルは論文作成を行う「研究総学」への橋渡しとしての読書指導に有効だと考えられる。

3 授業におけるビブリオバトルの教育的利用

ここまで兵庫県での事例を挙げてきたが、以下は、今後の取組の参考として他府県でビブリオバトルを授業に取り入れた事例を示す。

(1) 中学「国語」での実践

山梨大学教育人間科学部附属中学校では2年生の国語の授業において、「ビブリオバトルに挑戦しよう～聞き手を想定し、論理的に話す～」という実践が行われている⁶⁾。「伝える相手や目的に合わせて、論理的な構成や展開を考えて話す力を身につけさせる」ことを目標にし、生徒に目的意識を持って「話すこと・聞くこと」に取り組ませるためにビブリオバトルを活用している。ビブリオバトルの紹介や、発表の準備、実施、振り返りを6時間で計画し、授業で行なっている。特に注目されるのは、過去にチャンプ本に選ばれた生徒の映像紹介、話の組み立てを考えさせるための構成メモの作成、発表後に録画した画像を使ってのプレゼンテーションの分析・批評など、「話すこと・聞くこと」について指導し評価できるよう、様々な工夫を凝らしているところである。

(2) 「情報」での実践

お茶の水女子大学附属高等学校では情報の必修授業において「社会と情報 ビブリオバトルを題材とした情報発信活動の総合演習」という実践が行われている⁷⁾。「情報表現・情報発信の総合的な演習教材として」、「プレゼンテーションの多様な表現手法を振り返り」、「マルチメディアによる情報発信技術、安全に発信するための知的財産権の考え方など多様な知見・姿勢を体得」することを目指してビブリオバトルを取り入れている。ビブリオバトルの模擬大会を開催し、その発表映像をタブレット端末で撮影、編集し、肖像権に配慮したWeb共有をするという内容である。担当者はその成果として、情報の収集、編集、発信、評価という「情報発信を構成する一連の活動を楽しく体験できるゲームとして、格好の単元導入題材であったと考えている」と、振り返っている。

おわりに

ビブリオバトルは、発表・質問・投票によって全員が参加者となる。生徒が自分の読んだ本について自分のことばで紹介するのを聴衆が直に受け取ることで、本に書かれた情報に対する聴衆の親密度は高まり、本への興味・関心も高まっていく。一方、発表者は聴衆の反応を直接受け取ることで、人前で表現することへの自信を感じていると考えられる。

ビブリオバトル普及委員会の吉野は、前出の文章²⁾において次のように述べている。「ビブリオバトルは、スピーチコンテストや読書感想文と一括りに誤解されがちであるが、その設計アプローチと背景は全く異なるものである。ビブリオバトルでは聞き手となる聴衆が常に存在し、聴衆も発表者と同じく場を構成する重要な参加者であり、感想の主張よりも理解と共感をベースとした双方向コミュニケーションが設計の背景にある」。この設計の意図のように、発表者が本についての情報を発信するだけではなく、聴衆からの反応も受け取るという双方向のコミュニケーションが、参加者に大きな影響を与えている。

本の紹介には、ブックトークや読み聞かせなど様々な手法があるが、ビブリオバトルは、参加者自身が発表者として人と本をつなぐ仲立ちになり、聴衆も質問、投票する仕組みに特長がある。更に、発表者と聴衆との双方向のコミュニケーションが触媒となって、参加者に主体的な参加を促す効果を生む。現在、少しずつ授業での実践例が紹介されるようになってきた。今後様々な工夫を凝らした実践が行なわれ、また発表された実践を各学校が効果的に取り入れることが期待される。

実践の工夫の一例として、発表形式をステージ型ではなく、テーブルラウンド型⁸⁾にする方法がある。当所の高等学校初任者研修では、ビブリオバトル各班においてテーブルラウンド型を実施し、更にそこでの代表者が、ステージ型のビブリオバトルを行う形で実施している。その形式は、全員が参加者として発表ができるうえ、同時進行により時間が節約できる。また、予選・本選を経験することにより、どういう発表の仕方が良いのかも学んでいくことができる。参考として、テーブルラウンド型で実施した教員研修での実践例を紹介する。

兵庫県立図書館でのビブリオバトルの方法「郷土の資料でビブリオ・トーク」

目的 それぞれが郷土の資料でオススメの一冊を決め、互いに紹介しあって、郷土についての資料を知るとともに、郷土についての知識を深め、授業実践への一助とする。

方法

1. 20人が5つのグループに分かれる。
→それぞれのグループが、兵庫の旧五国をそれぞれ担当する。
→「Aグループ＝摂津（阪神・神戸）」「Bグループ＝播磨（東播磨・西播磨）」
「Cグループ＝丹波（丹波）」「Dグループ＝但馬（但馬）」「Eグループ＝淡路（淡路）」
2. グループごとに、①人物、②文化、③歴史、④産業の4種の分野担当を決める。
①人物・・・ゆかりの人物（出身・在職・在住など）
②文化・・・芸術（音楽・美術・文学・演劇etc）、科学、衣食住など
③歴史・・・遺跡、建造物、歴史書など
④産業・・・漁業、林業、農業、工業、観光、情報、サービス、地場産業など
3. 分野担当は、自分が担当した分野にまつわる資料・本のうち、オススメの本を1冊決める。
おすすめポイント：郷土について、「分かりやすい」「興味・関心を引く」「新しい情報を得られる」「知見が深まる」など
4. A～Eのグループごとで、自分の選んだ本についてそれぞれが紹介し、他の者がアドバイスをする。プレゼン4分 アドバイス2分（準備プレゼン）
※順番を回す役、アドバイスをする役、発表をする順番など各自、主体的に動く。
5. 次に分野ごとに集まり、先にもらったアドバイスを生かし、各4分で自分の選んだ本を紹介する。プレゼン4分 質疑応答2分（本番プレゼン）
6. 全員の発表後、挙手により投票。最も票の多かった本がチャンプ本。
7. 票のよく集まった発表を、代表者として全体で紹介する。

注)

- 1) ビブリオバトル公式ウェブサイト 普及状況 (データ)
(<http://www.bibliobattle.jp/pu-ji-zhuang-kuang-deta>)
- 2) 吉野英知「ビブリオバトルが目指す読書推進の新しい形」『兵庫教育』(平成 26 年 2 月号) 兵庫県教育委員会、2014、p. 6
- 3) 平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要、2014
(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h25/pdf/h25_chosa_kekka.pdf)
なお、国立青少年教育振興機構による「子どもの読書活動と人材育成に関する調査＜高校生用＞(平成 24 年 3 月実施)」においては、「この 1 ヶ月で本を読みましたか」という問いに対しては、「読んだ」と答えた高校生は 56.2%。第 59 回学校読書調査(全国学校図書館協議会、毎日新聞社平成 25 年 6 月実施)では、「5 月 1 ヶ月間に本を何冊読んだか」という質問では、1 冊も読まなかった生徒は 45.0%という結果が出ている。
- 4) その他の理由としては、「TV やビデオを見ていて時間がなかったから」(29.6%)、「読む必要を感じなかったから」(25.4%)、「本を読むのが嫌いだから」(23.8%)、「友だちとの遊びや付き合いで時間がなかったから」(23.8%)、「部活動や生徒会等で時間がなかったから」(23.5%) の順となっている(複数回答)。
- 5) 図 7 のビブリオバトル実施後の変化について、肯定的な回答をした生徒の集団と否定的な回答をした生徒の集団の 2 つに区切って傾向を調べた。具体的には、「とてもあてはまる」の回答に対して 1 点、「まあまああてはまる」の回答には 2 点、「あまりあてはまらない」は 3 点、「全くあてはまらない」を 4 点として、回答を得点化した。(10 項目なので、全て「とてもあてはまる」なら合計が 10 点。全て「全くあてはまらない」なら 40 点となる。) その際、合計 20 点以下の生徒は、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」の回答が大半を占めたと考えられることから、肯定的な回答をした生徒という集団に分類した。20 点以下の生徒は、17 名(7.7%)である。
- 6) 富高有樹「ビブリオバトルに挑戦しよう～聞き手を想定し、論理的に話す～」山梨大学教育人間科学部附属中学校 HP (http://www.wgr.yamanashi.ac.jp/modules/research/index.php?content_id=154)
- 7) 小野永貴「社会と情報 ビブリオバトルを題材とした情報発信活動の総合演習」『研究紀要』(Vol. 59) お茶の水女子大学附属高等学校、2014、p. 148 -155
- 8) ビブリオバトル北海道代表の室蘭工業大学准教授 須藤秀紹氏は、第 55 回北海道図書館大会(平成 25 年度実施)で、ビブリオバトルの実施方法をステージ型と、テーブルラウンド型に分けて紹介している。

<参考文献>

- ・谷口忠大、川上浩司、片井修「ビブリオバトル：書評により媒介される社会的相互作用場の設計」、2010
- ・谷口忠大「書評の相互作用が生み出す語りのメディア：ビブリオバトル」、2010
- ・谷口忠大「ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム」、文春文庫、2013